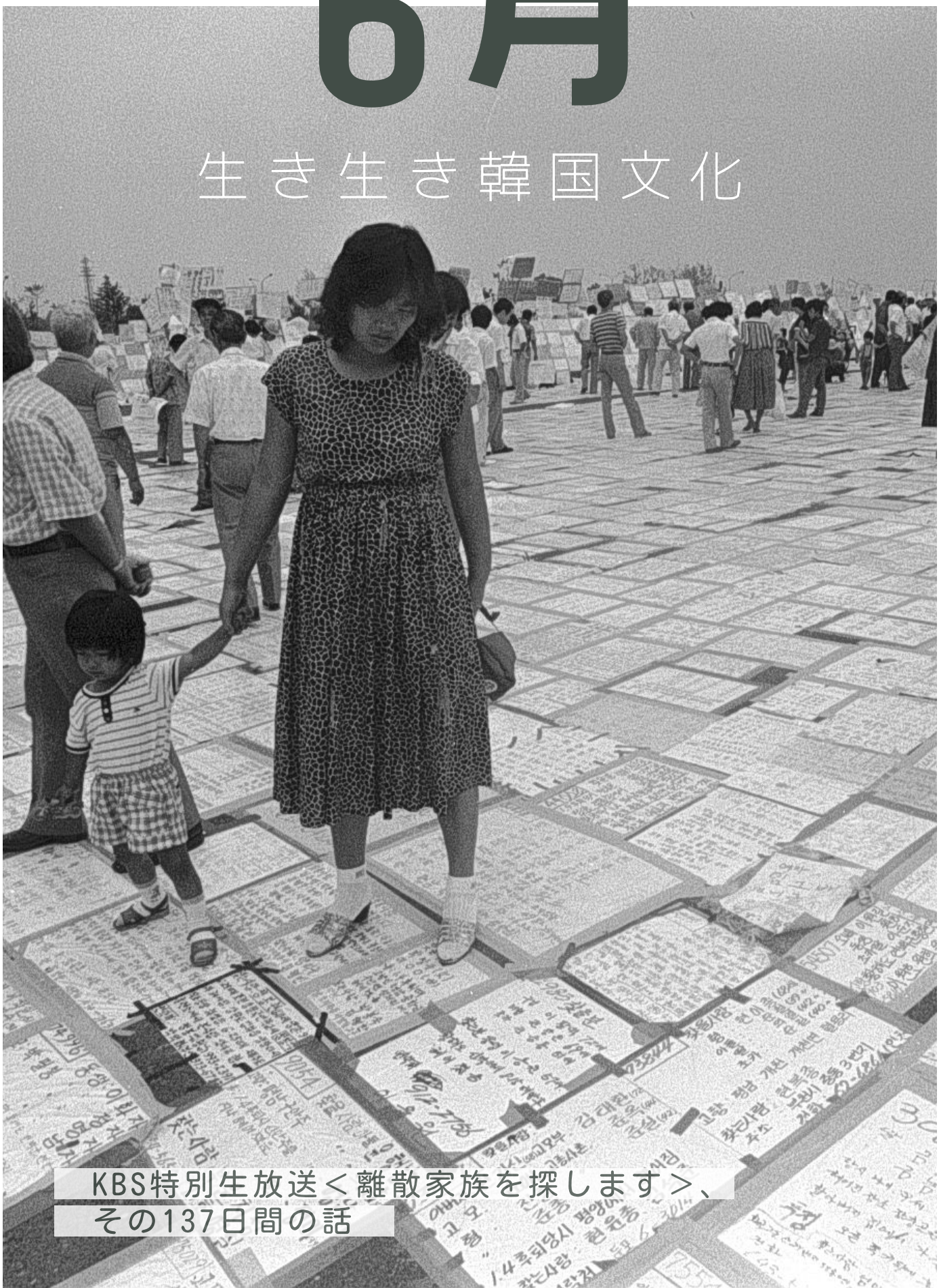
6月

生き生き韓国文化



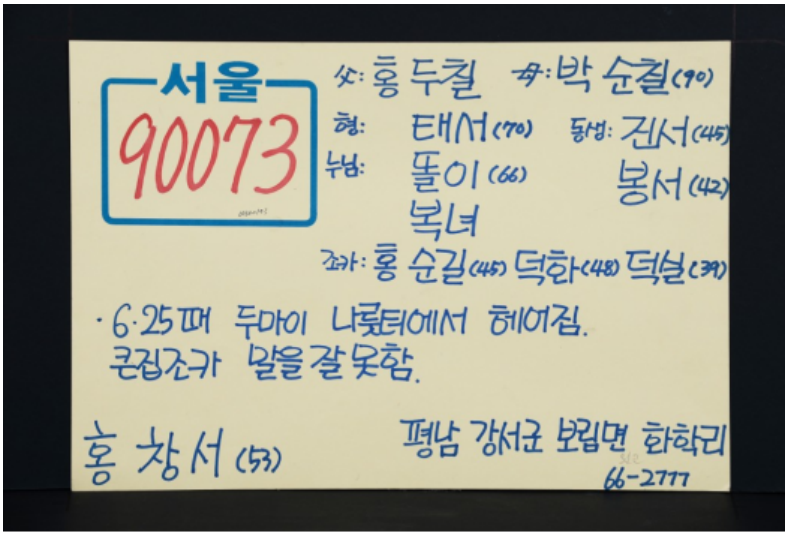
KBS特別生放送＜離散家族を探します＞、
その137日間の話

137日間続いた10万人の物語、「離散家族を探します」

写真：KBSアーカイブ

1983年6月の31日、韓国で奇跡の番組と呼ばれているある番組が始まりました。それはKBS（韓国の公共放送局）で放送された『離散家族を探します』です。この番組は、計139日間にわたって「生放送」され、最高視聴率78%を記録した空前絶後の番組です。ここでの離散家族とは、文字通り消息すら知らずに離れて暮らす家族で、韓国では主に1945年の南北分断と1950年の朝鮮戦争以降、ばらばらになった家族のことを指します。番組では切ない離散家族の再会シーンが連日流れていました。戦争中に行方が分からなくなった子供を探す母親、いつの間にか成人になって現れた子供、離れ離れになっていた兄弟…彼らは生放送中だということも忘れ、再会の嬉しさと30年間の悲しみを訴えました。

特に、戸籍のデータ管理が行われなかった70年代までは、同じ韓国に住んでいても、連絡する方法がなく、漠然と北朝鮮にいるだろうと思いながら離れて暮らしていくケースも多くありました。このような問題を解決するために、本プログラムは韓国国内、あるいは海外（この場合は戦争孤児として養子縁組になったり、日本に渡ったケースが多かった）の離散家族だけでも再会を推進しようという趣旨から始まりました。



写真：KBSアーカイブ

世界でも類を見ないこの放送は90分の単発番組として企画されました。当時、司会者だった「イ·ジヨン」アナウンサーは番組の始まる前までは10家族程度が会えると予想していたそうです。しかし、いざ放送が始まってみると、当初150人を招待した客席に何と1千人を越える離散家族が訪ねてきて、放送中には業務ができないほど電話が殺到しました。そのように始まった放送はなんと138日間の延長生放送につながりました。また、放送期間中にKBSを訪れた離散家族は5万人余り、番組にはなんと10万件以上が受け付けられ、そのうち53,536件が放送され、結果的に10,189家族が再会することができました。

実際、離散家族の再会を推進したのは、このプログラムが最初ではありません。すでに70年代から新聞やラジオを通じて離散家族を探そうとする動きがありました。しかし、新聞やラジオの特性上、テレビのような爆発的な反響を呼ぶことはできませんでした。83年になってからようやく離散家族探し放送が実現したのは、放送技術の発達と深い関連性があります。生放送で国内各地はもちろん、海外からも中継できる技術をある程度身につけたため、この奇跡のような放送が生まれたのです。

また、番組の初日からKBS本館はもちろん、放送局の前にある汝矣島広場は家族を探そうとする人々でいっぱいになりました。殺到する申請によってKBSでは、これ以上申込を受け付けられなくなったので、自ら張り紙を書いてKBS

本館の建物や壁、柱に貼り付け始めました。張り紙はまもなく本館全体を埋め尽くし、次第に張り紙空間は汝矣島広場にまで拡大しました。当時、広場に出てきた人々はお互いの切ない持ちをよく知っているため、壁と床に数えきれないほど張り紙がある中でも、他人の張り紙の上に自分のものを付け加える人は誰一人いなかったそうです。

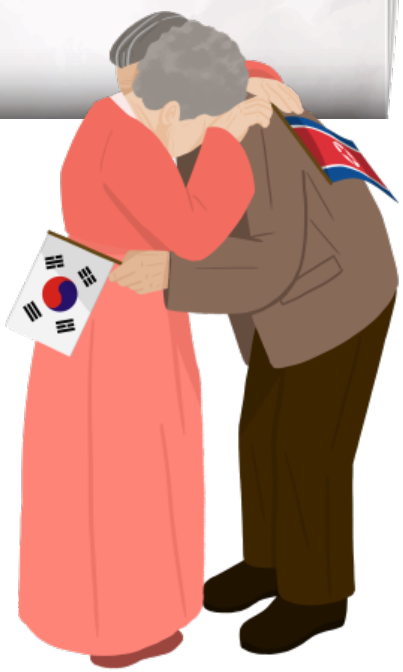
また、番組のテーマ曲として使われた有名な二つの曲がありますが、それは＜失われた30年＞と＜誰かこの人を知らないですか＞という曲です。特に、失われた30年を歌った当時新人歌手のソル·ウンドさんはこの歌で一躍スターになりました。ソル·ウンド氏は放送期間中にこの歌を何と千回も歌ったそうですが、客席に立ちながら観客と一緒に泣いていたので、どのように最後まで歌ったのか思い出せないぐらいだと回顧しました。

잃어버린 30년

비가오나 눈이오나 바람이 부나
그리웠던 삼십년 세월
의지할 곳 없는 이 몸 서러워하며
그 얼마나 울었던가요
우리 형제 이제라도 다시 만나서
못다한 정 나누는데
어머님 아버님
그 어디에 계십니까
목메이게 불러 봅니다

失われた30年

雨が降り、雪が降り、風が吹き、
恋しく想った30年
頼る瀬もないこの身悲しくて
どんなに泣いたものか
兄弟今も再び逢って
情を分かち合えぬのに
お母様、お父様、
何処にいらっしゃるのですか
咽びながら 呼んでみる



写真：韓国日報

佐世保市の姉妹都市である坡州(パジュ)市には、このような離散家族や失郷民（北朝鮮が故郷の人）のための場所があります。それは、臨津閣(イムジンガク)に位置する望拝壇（マンベダン）というところで、北にいる家族や故郷に向かって祭祀を行います。また、望拝壇の隣に位置する望郷の歌碑には、連日「失われた30年」が流れています。失郷民たちはここを訪れ、北の地を眺めながら家族と故郷を懐かしんだりします。

一方、南北政府の合意の下、何度か離散家族の交流を進めてきましたが、南北関係が膠着している状態では、離散家族の再会が実現するかは未知数です。韓国と北朝鮮に分かれた離散家族第1世代は、2022年基準で最も若くて76歳に達するなど、高齢化が深刻になっています。残念ながら、約5万人の離散家族再会の待機者のうち、昨年だけで3342人が北朝鮮に残された家族の生死さえ確認できず、この世を去りました。もう彼らに残された時間はそれほど多くありません。一日も早く彼らが家族や故郷に対する懐かしさを癒すことができるように、再会の場が開かれることを心から祈ります。